

キーワード

- 1 パンのみで生きていけない。心の問題。希望が必要。
- 2 アートの力で文化復興を。「アート・エイド神戸」設立。
- 3 「共同臨死体験」で見たユーフォリアが市民社会へと繋ぐ。
- 4 自律した市民による新しい寄付の文化を創る「装置」。
- 5 危機対策と社会の文化化。

はじめに

本稿は、災害などの非常時にアートが果たす役割を市民レベルで検証、提言する。阪神淡路大震災以後の社会的な課題が、未成熟な市民セクターを育てることであり、それは文化においても同様である。その取り組みが芸術文化の内実さえも変えていく可能性があるから。そのために震災直後から、私が関わった「アート・エイド・神戸」による文化復興を事例として上げ、そこから学ぶものと、今後の課題について述べる。

心を癒すための、日常ではあまり意識されない文化が、強張った生活の緊張を緩和し、生きがいを与え、ときに肉体的にも精神的にも弱った心身を癒し人間の本来に立ち戻らせる確かな効果があるから。「このような時期に何故アートなのか？」との問いかけには「人が生きていくには空気や水やパンが必要だが、それだけでも生きてはいけない。心の問題、すなわち希望が大切だ」と答えた。それまで市民から遠いと思われていたアートが市民生活の中に入っていく、選良意識をもっていたアーティストたちが震災を期に、その存在基盤を据えなおすきっかけとなった過程をたどることにもなるからだ。

設立の経緯と目的

(1) 立ち上げ

震災直後の1995年2月18日、アート・エイド・神戸実行委員会を立ち上げた。ネーミングについては神戸の文化は自分たちの手で守るという決意と、芸術家自身も神戸の復興のために力を結集するという願いをこめた。

委員会のメンバーは6名。詩人、画家、作曲家、美術館関係者、大学教授、そして書店・画廊を営む私が事務局長に就任し、事務局は元町にある海文堂書店内に置いた。震災の3年前に、「市民自らが文化を支える」という理念を掲げて立ち上げた(公)亀井純子文化基金を通じて、分野を越えた芸術家のネットワークと、資金獲得のための経験と知識を持っていたことが緊急時に有効であった。

(2) 財源の問題

こうした文化活動を支援する財源としては(1)市民からの寄付(2)企業からの寄付(3)事業による収益(4)復興資金からの助成などがあり、多くの義捐金が被災地に寄せられたが、アートによる「心の救援」を大切に考える市民たちの寄付がアート・エイド・神戸に寄せられた。寄付の選択肢が多様であって、その目的と用途が明確であれば、よりの確な復興救援が可能になりうる。

画家達に呼びかけて「チャリティー美術展」を開催。その売上げを活動の財源とし「神戸文化復興基金」

を立ち上げた。事業による収益についていえば、それが心の復興に必要であるからこそ事業と認められ、それがまた収益として還元され巡回していく仕組みでもある。それが震災詩集の出版であり、チャリティーコンサートである。詩集は販売され、異例の売れ行きを示し、コンサートでは千住真理子（ヴァイオリン）やフジコ・ヘミング（ピアノ）など著名な音楽家がボランティアで出演するなど多彩であったが、被災市民は無料で、余裕のある方には募金をお願いした。

基本的に活動は芸術文化活動支援が中心であったので最終的な財政の状況だけ報告すると、最初の5年間に寄せられた寄付と事業収入の合計は約8千万円、私たちの事業に3千6百万円、芸術文化活動支援の助成に使われたものが44百万円となった。

（3）被災アーティストへの支援

被災地ではアーティスト達もまた被災者だ。私達は彼らと共にあることを伝える「芸術家緊急支援制度」を作り、簡単な申請で10万円/人を贈った。この制度は神戸の震災のちょうど1年前に起こったサンフランシスコ近郊のノースリッジ地震の事例に学んだ。彼等が希望と元気を取り戻してこそ、文化による復興がはじまると考えた。

申請は簡単で

- 1 アーティストとして10年以上活動していること
- 2 被害の状況を確認できる同じジャンルの二人の署名
- 3 1年以内に活動を再開する予定があること

を簡単な様式で記入し申請する。

2年間にわたり3回の募集で82名に合計730万円を贈った。自分たちが事業の主体となるよりもアーティスト達を支援し、彼らが幅広い活動を展開することによって、大きな成果をあげることが出来た。

課題：この制度を、他地域での大規模災害時に是非、応用していただきたい。

一人10万円という金額があまりにも少ない。実効性のある支援であればせめて20万円は必要。でも、砂漠で出会ったオアシスという言葉をいただいた。精神的な効果もふくめ制度化する必要がある。

（4）壁画キャンペーン

震災の跡は、ブルーシートや白い工事仮囲いばかりで、粉塵が舞う、索漠たる光景になる。そこで街を美しく、少しでも潤いを感じてもらいたいと「壁画キャンペーン」を始めた。「工事現場にアートを」と全国に呼び掛け、元町商店街、三宮商店街、神戸国際会館、神戸市役所、銀行、三宮駅など、大規模な建設仮囲いに、多くの画家や学生が参加し壁画を描いた。この試みは、のちには当然のこととして、受け継がれていった。

（5）後方支援ということ

アートによる復興を担うための組織が、すべてを事業主体として行うという考えかたもある。そのことによって、もっと規模が大きくなり、行政からの支援も可能かも知れない。でも、私達は後方支援を担当することを選んだ。財源とネットワークと様々な知的資源をもって中間支援に徹する組織が、極めて有効だ。活動はすべて個々の芸術家あるいは集団の実践だ。私たちは時には発議し、時には助言し、助成することによって、方向性を示したり、繋げたり、後押しする役割を担った。それが簡素な組織で迅速な意思決定を可能にし、活動を拡げ、多彩であることを可能にした。この活動に参加し、事業を担った人数は数

千人を下らないはずだが、決定すれば彼らが主体的に実施するのだ。

(6) クロスオーバーする藝術

震災までの平時においては、各ジャンルのアーティストたちは、夫々の分野や、所属する団体での活動が中心であった。そして、夫々の鑑賞者を想定して活動してきた。しかし被災地では、被災市民を癒し、勇気づけ、生きる力を与えるというアートの本質に立ち戻りながら、従来の枠組みを越えていく必要にせまられた。

アート・エイド・神戸は震災後、三ヶ月で「阪神淡路震災詩集」を出版。詩人たちは自分の所属する詩誌を越えて参加し、毎年、第三集まで震災詩集を出版し、詩集としては異例の販売実績となった。各地で「震災詩朗読会」が開かれ、私達の呼びかけで、ここから歌曲、合唱曲、器楽曲が生まれた。車木容子さんの詩的朗読劇「50年目の戦場神戸」は50年前の焼け野原と被災地を重ね合わせて、どん底に生きる人々の力強さと信頼感につながれたぬくもりを伝えた。この優れた劇は台詞と音楽だけで構成されていて、30分でも1時間でも、出演者も5人でも20人でも、プロでもアマチュアでも、一定の訓練を受ければ自由に上演できるという震災が生んだ新しい劇の様式で、上演には多くの鑑賞団体が協力し、やがて全国各地で上演されるようになった。

活動の多彩さは構成委員がそれぞれの分野で専門家であり、かつ幅広い視野と十分な人脈を持っており、この運動を触媒として分野を超えた連携・クロスオーバー（交流）が生まれた。詩と音楽、詩と美術と演劇、詩と美術など芸術ジャンルの交流だけに止まらず、芸術と市民活動、企業と芸術支援などかつてない規模で連携した。仮設住宅支援のボランティアとの連携、高齢者支援、多文化共生、環境団体などの企画に文化は欠かせない重要な要素となった。

(7) 情報の発信

アートが持つ力は人間の感性、情感に直接に訴えていくので、民族、地域、文化、歴史の違いを超えて共有できる伝播力、普遍性を持っている。震災の体験を伝え、失われた記憶を一瞬にしてフラッシュバックさせるアートを被災地外へ発信することは重要である。

「震災を忘れないで、支援してください」「震災を風化させてはならない」、というよりも「震災で学んだことを伝えたい」、「大規模災害は他人事ではなく、あなた自身の問題ですよ」というメッセージをアートの力によって伝えた。

アート・エイド神戸の果たした役割を要約すれば

(1) 市民みずからが文化を支えるという理念を掲げ(2) 震災後の文化後回しの風潮を打破し(3) 文化を支えるための資金を集め(4) その資金によって文化活動への資金助成を行い(5) 幅広いネットワークによるノウハウを提供し(6) 文化によるまちづくりへの提言を行った。

その後の取り組み

(1) 共同臨死体験

私は神戸の震災体験を「共同臨死体験」と呼んでいる。近代都市において、これだけ多くの人が「臨死」という体験を共有したことは稀だ。私達が感じた「ユウフォリア（至福感）」は、現実には挫折、消滅したにしても、そのとき人々が垣間見たアルカディア（未来ビジョン）は、理念として私たちの歴史を確実に

回転させる力を持っている。

ここでいう災害とは自然災害やテロ、飢餓などのカタストロフィ（破局）想定しているが、平時の現在ですら地球規模における環境、食糧、資源は勿論だが、人間としての絶望、虚無などの精神的危機が日常的に進行しており、世界は未曾有の危機にあるという認識を抜きに芸術は存在しえない。これらを見据え、回避する海図こそが「ユウフォリア・ビジョン」であり、そのことを表現することがアートの時代を超えた役割だ。

「ユウフォリア・ビジョン」とは

経済至上主義からの脱却

自然との共生社会の実現

それらの総体として、芸術に携わるもの全てが、人間として、さらには表現者としての原点に立ち、自分の存在理由を問い直し、人と人の心をつなぎ、本然を現出するというアートの原点にシンプルに回帰すべきことを指す。

優れた作品は震災を経験しようが、しまいに関係なくある。生を凝視し、死を凝視する。人間の存在の在りかたへの認識を問い続けることが重要だ。

（２） 播かれた種

今在る社会的危機に立ち向かい、「文化による社会創造」を実現するためには、文化への重点的な投資が地域コミュニティ再生の鍵である。その基本的なプラン（提言）は「ニュー・コンパクト～文化振興による地域コミュニティ再生策～」として（社）企業メセナ協議会から提言されている（2009/3/16）。ここで、取り上げるのは、その中の、地域における市民セクターの強化についての試論である。

市民社会というならば、自覚・自立市民による市民力を高めなければならない。そのためにもアートの果たす役割は増々、重要である。

人材を育てる

アートを愛し、知識、見識、ネットワークを持ったアートプロデューサーやアートマネージャーが育ってきている。大学でもこの種の講座が持たれ、社会人を講師とし、インターンで地域に派遣し、サテライトを持ち、学生の提案を地域が生かし、様々な実践的な交流が生まれている。アーティストを目指す若者も多い。こうした文化的人的資産が蓄積していくことによって、生産であれ、商業であれ、情報であれ、社会全体を文化化していくことになる。そうした人材を雇用の形で戦力化していくことが課題である。

地域を生かす

地域の歴史・風土に根ざす文化的潜在力を、市民の文化に取り組む力によって顕在化する試みは、各地で盛んになってきた。それは伝統産業や、祭り、食、町並み、住民までを含んだ総体的地域固有の資源の再発見でもある。住民が主体であることによって、従来の与えられたイベントから、持続的な街づくりとして各地にNPOを生み、若者を巻き込み、地域を変えつつある。

震災激震地区である西神戸で「Art Village Center」や「Dance Box」「映画資料館」などの、震災後生まれた「文化装置」が根を下ろし、「新開地まちづくりNPO」が、新長田では「鉄人28号プロジェクト」が、兵庫区平野町では、平清盛の福原宮史跡を見直す活動が、いはば衰退地区となりかねない地域を文化で再生しようとしている。

これらの「文化装置」は従来の「ハコ」と違って、比較的小規模であるがために「ハコ」の維持が目的化することなく、地域の自治組織や商店街と連携するとともに、地域に「境界性（マージナル）」を持ち込み活性化させるという役割を担っている。文化による「街づくり」は、「にぎわづくり」という観点に留まるかぎり、限界がはっきりしている。それは「イベント」という薬を打ち続けることとなり、健康体にはならない。地域の意識改革につながり、商店街であれば個店が輝きだし、文化を理解した人材が育ち、地域全体が時代におけるポジションを確定しなければならない。それを促すのがアートプロデューサーや「文化装置」のもつ「境界性（マージナル）」である。地域に「切花」を飾ってはならない。

（３）新しい市民社会と寄付の文化

明治以来の日本は国家という絶対的な存在から、企業との車の両輪へと移行し、現在は市民との三位一体へと移行する段階だ。市民力を高めることが社会全体の安全保障であり、市民のプライドを生み育てる。以下は、そのための小さな装置である。

装置（エンジン）を作る

制度というのは公的なものであり、アートは個人的なものだ。それゆえ多様さが保証されねばならない。一つの組織、制度を作るよりは誰でも出来る、多様な装置を作ることが大切なのだ。前項で「文化装置」に触れた。これは、いわば「車」であり「船」だ。それを動かす装置（エンジン）を市民が支援する試みを示す。

市民自らがアートを支え育てる基金という装置

‘92年に40歳で亡くなった亀井純子さんから寄せられた1千万円を元に（公）亀井純子文化基金を設立した。これまでの累計助成額は18百万円、基金残高は12百万円。‘09年に、それに続く一般財団「神戸文化支援基金」を設立した。設立時の基金は13百万円。早い時期に、二つの基金を合併して「公益財団」を設立する。これは新公益法人法による、公益財団法人を目指すために考えたステップだ。

多くの支援者の小さな寄付を集めて芸術活動の助成を市民レベルで継続して行う。

年間200万円の助成を行う。こうした「草の根基金」は簡単に、誰でも出来る。それぞれの目的を掲げた多くの基金や財団が生まれて、アーティストや「文化装置」を支援することが大切だ。それらを束ねるマンション型財団も視野に入ってきた。

NGO/NPOのためのファンドレイジングのための装置

震災後、新しく生まれた市民活動は、いまや社会において無くてはならぬものとして認知されている。しかし、規模は小さく、その活動を支える財政基盤は脆弱だ。そこで単独では出来ない文化的な催しを協働で主催し、ファンドレイジングを行うシステムを考えた。

神戸のNGO/NPO14団体が「ぼたんの会実行委員会」を結成し、ファンドレイジングのための「夜会・ぼたんの会」や「1・17 竹下景子 詩の朗読とコンサートの夕べ」や「講演会」「チャリティー美術展」などを主催した。構成団体が共同で文化的な催しに取り組み、チケット販売額の50%が還元される。その金額は7年間で15百万円となり、活動を支える財源として有効な方法であることが証明されている。

文芸出版助成

舞台芸術に対する助成制度は兵庫県、神戸市ともに用意されてきた。しかし、こと文芸については、賞はあっても助成制度はなかった。文芸風土が豊かであるのに、兵庫には出版社が育たず苦境にある。そこで、

兵庫県の「震災復興計画推進委員会」(1996年3月)で兵庫の出版物を地元の出版社で刊行する場合の助成の仕組み求めた。結果的には出版社の支援は盛り込まれなかったが、'96年に「被災地芸術文化活動助成事業」として文芸作品出版助成(50万円限度)が実現し、6千万円が予算化され出版活動は活況を呈した。この制度は終了したが、行政の一律な基準ではない、厳しい審査を経て出版助成する「装置」があってもいい。その出資は文学関係者を含む市民が担い、その後は印税の寄付などを含めた新しい寄付の形を模索すればいい。「装置」が出来れば、継続的に出版文化を支援することが可能である。

(4) 都市文化の階層性

文化の最も基本的な働きは、人間環境への適応を助けること、日常生活の欲求の充足を図ることにある。その「現実適応」ないし「生活維持」の機能に力点を置かなければ、文化とはもともと「実用的なものだ」ということも出来る。しかし、その実用性を超える働きもまた文化の中に含まれている。現実を批判し導こうとする理想主義的な「超越」の側面を文化は常に備えている。文化の自己懐疑の働きとしての「自省」「自問」であり、「適応」「超越」「自省」がからみあったバランスのとれたダイナミズムが創造の基盤である。

日常生活のなかでの娯楽、気晴らし、慰めから、自分を高め、知識や教養を得る、さらには自己表現として、あるいは社会意識として、社会変革として、様々な文化の階層性を想定することが出来る。都市の文化的豊かさ、あるいは創造性とは、それぞれの階層がピラミッド型をなし、バランス良く存在することが必要である。

(5) 課題

文化とは「日常を生きる形」と定義することができる。備えあれば憂いなし、すなわち日常に出来ないことは非常時にも出来ない。経済や効率に抗して、人のあり方に届くアートが平時にもある。危機の時のレスキューとしてではなく日常の体験が蓄積され、あるときには過去の経験が現在の経験を強め、干渉し、新たな経験へと繋がる、そうした過程の全体が具体的な持続として連鎖していくのだ。

そのアートのあり方には、様々な様相やレベルがあり、役割が与えられている。私が書こうとしたのは、最も必要でありながら、最も脆弱と思われる自立した市民が支える文化的基盤のことであり、提言し、実現していく市民力を育てるための「装置」についてだ。国や自治体の行政改革や財政困窮によって、あるいは企業が直面する不況によりメセナが見直しを迫られるなど、アートを取り巻く環境は厳しくなる一方である。しかし、一方では成熟社会の中で、人が人として生きるためにアート(芸術)が必要であるという認識も定着してきた。また、企業においてもCSR(社会貢献活動)が重視され、そのためにも「文化力」は重要なイメージであり、また市場であることも自明となってきた。街づくりにおいても同様である。見直しを迫られている地域コミュニティの核としての文化装置、すなわち美術館、文化ホール、ギャラリー、文化教室などの活動を支援するために、制度でも組織でない、この小さな「装置」が、点在して地域に組み込まれていくことが望ましい。推進エンジンとして働き、メンテナンスを怠らねば永続的だ。組織は、えてして内向的になり保守化し、存続そのものを自己目的化していく。制度は硬直的になることを免れることは難しい。こうした「播かれた種」が育ち、それぞれの大地で根付き、「散水装置」によって緑の大地を蘇らせることを願っている。